

青梅市文化財ニュース

第 1 7 7 号

平成14年7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

四季折々の味覚を楽しみました

今では、ごく一般的な果物になっているリンゴやミカンも昭和20年代ごろまでは、そう簡単に口にすることはできませんでした。リンゴは病気になること、運動会や遠足のときだけ買ってもらえる＜貴重品的＞なものであって、兄弟が多いと半分に切って持って行くことさえありました。農業が国の基幹産業であり、米麦の生産と養蚕を、その中心に据えた生産構造の中にあつては果物栽培は付随的なものとされていました。

このような中で人々は、買って味わう＜上等な果物＞は口にすることができませんでした。代わりに、家に植えてある『生り樹木（実の生る木）』から穫れる＜自家製の果物＞を大切にしていました。子供たちは、いつ、どの木の実が、食べごろになるかをよく知っていて、その時季の到来を楽しみにしていました。

関東地方には次のような『生り樹木』がありました。

ユスラウメ 庭先の日当たりの良いところに植えてあつて、子供たちは梅雨のころに赤く熟した実（大豆の大きさ）を、よく食べました。今では熟年世代の大人たちだけが食べたり、果実酒を作ったりして楽しんでいます。青梅市では、ヤシャラグミと呼ばれています。

ニワウメ 梅雨入りの前ごろに実（大豆の大きさ）が赤く熟します（藍色に熟すものもあります）。コウメとも呼ばれて仁（種の固い殻の中にある軟らかい部分）を漢方薬に使います。

アンズ 中国から、古い時代に渡来しました。仁は杏仁（きょうにん）と呼ばれて漢方でだいじにされています。梅雨の後半に熟す実には、すばらしい香りがあつて『そのまま食べても佳し、果実酒にすればさらに佳し』で近ごろ、信州産のものがたいへん人気を集めています。

トウグミ わが国全土に自生しているナツグミの変種です。実にはやや渋みがあるものの、たいへんよく生るので広く植栽されていました。青梅市内では、タワラグミと呼んでいます。

ウグイスカグラ 梅雨のころに赤く熟す実（大豆の大きさ）には淡い甘みがあります。青梅市内では、チョウチングミと呼ばれていますが、今では知らない人が多くなっています。

（裏面につづく）

ビワ 種を蒔くとよく生えますが実生のものは果肉が薄く、種ばかりが大きいので植栽するには接ぎ木したものを買って使います。『枇杷の花咲く年の暮れ』と明治時代の小学唱歌にもあるように花が師走の寒風の中で咲き、実は梅雨のころに食べられるようになります。

モモ（スモモ） 今では、プラムなどと、ハイカラな名前と呼ばれていますが昭和30年代ごろまでは<スモモ>と呼んでいました。一般種と、実が大きくて果肉が厚く、甘みが強い、ボタンキョウという優良品種とがありました。

モモ（スイミットウ） どの家にもある、というものではなく、子どもたちにはあこがれの的存在になっていました。実が青いうちに落ちてしまったり、収穫直前にガ（蛾）にやられたりして、よいものがなかなか穫れなかっただけに<水蜜桃>という言葉には特別な響きがありました。市内の二俣尾地区は江戸時代から桃の産地として知られていました。

イチヂク よく実がつきますが秋の初めの長雨のころに熟するため、実の穴から雨水が入って傷むことがありました。いちどにたくさん食べると舌の表面が痛くなるので注意を要する果物でした。今では輸入品の生食用や乾燥品がスーパーなどで売られています。

ブドウ 一般家庭で植えてあるのはデラウェアと黒ブドウぐらいのものでした。8月の月遅れの「お盆」の前に実が食べられるようになりましたが、その香りと糖分が蜂たちを呼び寄せて集中攻撃を受けるため、紙袋を作ってかぶせました。

ザクロ 昭和20年代ごろまでは小中学校の『秋季大運動会』は11月に行われていました（5月の運動会を春季小運動会と呼びました）。晩秋になるとザクロの実が食べられるようになるので、運動会や遠足に持っていきました。どの家にもあるというものではありませんでしたが子どもたちは、どの家のザクロが甘いのか、酸っぱいのかをよく知っていました。

カキ 農山村では、たいていの家に植えてありました。子どもたちは学校から帰ると木に登って実をもぎとって食べました。各地で今なお、庭先に大木が残っている家がありますが小鳥たちだけが、その味覚を楽しんでいます。霜が降り始めるころに食べた熟柿（渋柿）の、あのヒンヤリとした食感に今も郷愁を覚える人が多いようです。市内の友田、長淵地区は柿の産地として有名でした。また、青梅特産の和傘に塗る柿渋をとる渋がきも方々に植えてあり、裏宿町の一帯には「裏宿がき」という地域品種もありました。

コウジミカン 西関東の山沿いには実が小ぶりの、コウジミカンがありました。たくさん実が生り、種が多いことから『子宝みかん』と呼ぶ地方が多く、正月の供え餅の上に飾ったり、皮は陳皮ちんぴと呼んで七味とうがらしの香料にしました。青梅市内では西部方面の山沿いの家々で多く植えられていたので『沢井みかん』とも呼ばれていました。（文責 中西 勲）